早稲田大学総合人文科学センター
2023 年度年次フォーラム

朝河貫一生誕 150 年記念シンポジウム「朝河貫一の時代と学問――福島・早稲田・アメリカ――」開催報告

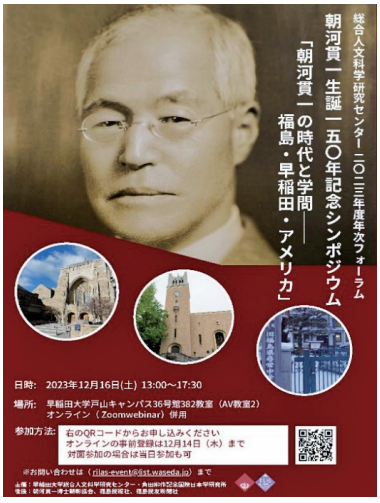
The birth 150 years memory symposium of Kan’ichi Asakawa, “The Times and the Study Situation when he lived”

甚　野　尚　志

2023 年 12 月 16 日に、早稲田大学総合人文科学研究センター（RILAS）2023 年度年次フォーラムとして、朝河貫一生誕 150 年記念シンポジウム「朝河貫一の時代と学問―福島・早稲田・アメリカ―」を開催した。本シンポジウムは、早稲田大学総合人文科学研究センター、同研究部門「角田柳作記念国際日本学研究所」が共同主催し、朝河貫一博士顕彰協会、福島民報社、福島民友新聞社の後援を得て実現したものである。

朝河貫一（1873～1948）は、福島県二本松市に生まれ、東京専門学校文学科に学び、その後、アメリカのダートマス大学に留学して、日本史を世界史の中に位置付ける意義に開眼した。その後、イェール大学大学院では「大化改新」の博士論文を提出し、ダートマス大学の講師となり、さらにイェール大学の日本文化史講師となる。1929 年に刊行した『入来文書（The Documents of Iriki）』は、日本中世の封建制成立の過程について初めて欧米の歴史学界に提示し、フランスのマルク・ブロックらの高い評価を得たが、その日欧比較法制史研究の業績により、朝河はイェール大学の歴史学教授となった。また、その一方で朝河は、日露戦争以降の日本の大陸侵攻政策と軍国主義に対して、日本の政治家や知識人に書簡などを通じて一貫して批判した。朝河は日米開戦の直前に「昭和天皇宛大統領親書草案」を起草し、最後まで開戦阻止の運動をアメリカで行った日本人としても著名である。

今回のシンポジウム以前にも早稲田大学では、2015 年にシンポジウム「朝河貫一と日本中世史研究の現在」を開催し、朝河の日欧比較封建制論の意義をついて討議した。その後、2018 年には、朝河貫一没後 70 年記念シンポジウム「朝河貫一と人文学の形成」を開催し、歴史学者（historian）、司書（curator）、平和の提唱者（peace advocate）としての各側面から朝河の業績を総合的に議論した。その後も、研究が精力的に進められる中、最近になって、演劇博物館に朝河貫一から坪内逍遙に宛てた未整理書簡が多数存在することがわかった。本シンポジウムは、朝河貫一生誕 150 年の記念も兼ねて、朝河発坪内宛書簡の調査・分析を中心としながら、朝河と東京専門学校との関係、また、日本人の文学者たちとの交流、さらに、イェール大学での活動などの問題も含め、国際的な立場から日本学を切り拓いた朝河の人生と業績に改めてスポットを当て、その時代と学問の再検証するために企画された。



日時：2023 年 12 月 16 日（土）13:00-17:30
場所：早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 382（AV 教室 2）教室
オンライン（Zoomwebinar）併用

《開会の辞》　13:00-13:05　河野貴美子（早稲田大学文学学術院教授）
《趣旨説明》　13:05-13:20　甚野尚志（早稲田大学文学学術院教授）
《研究発表 1》　13:20-13:50　甚野尚志
「若き朝河の歴史学への開眼：Margaret Dimond 宛書簡と逍遙宛書簡から」
《研究発表 2》　13:50-14:20　藤原秀之（早稲田大学非常勤講師）
「朝河貫一と坪内逍遙　書簡を通じてみた学問上の交流」
《休憩》　14:20-14:40
《研究発表 3》　14:40-15:10　真辺将之（早稲田大学文学学術院教授）
「朝河貫一と東京専門学校」
《研究発表 4》　15:10-15:40　宗像和重（早稲田大学文学学術院教授）
「朝河貫一と文学―バイロン・逍遙・関戸信次―」
《研究発表 5》　15:40-16:10　中村治子（イェール大学司書）
「朝河書簡と米国大学図書館の動向：Helen Dunham の書簡を中心にして」
《休憩》　16:10-16:30
《全体での討議》16:30-17:20
《閉会の辞》　17:20-17:30　山本聡美（早稲田大学文学学術院教授）

本シンポジウムは、早稲田大学演劇博物館所蔵の朝河貫一発坪内逍遙宛未整理書簡 68 通の紹介と分析を一つの大きな軸とし、その新発見書簡の問題を中心としながら、広く、朝河をめぐる日米での人的な関係、彼の学問のあり方とその評価などをテーマとして行われた。

まず、今回の演劇博物館での新発見書簡の紹介と分析が、第一報告の甚野、および第二報告の藤原によりなされた。そこからは、朝河がアメリカ留学時にどのように博士論文執筆に至ったか、また、その後、朝河の東京専門学校での求職問題、東京専門学校内部の諸問題とどうかかわったかが明らかにされた。また第三の真辺報告からは、朝河の世代が東京専門学校で、どのような位置づけの世代かが、東京専門学校の各種資料を用いながら明らかにされた。第四の宗像報告では、イェールで朝河と接し、その影響を受けた日本人文学者とのつながりが解明された。第五の中村報告では、イェール大学で新たに発見された朝河書簡が紹介され、また、イェール大学での朝河文書のデジタル化とのその公開の問題についても紹介がなされた。

全体の討議では、今後の朝河関連資料の公開の問題、さらに、今後の人文学研究の進展にとり不可欠な、ネット上での資料公開の問題などが議論された。今回のシンポジウムを通じて、朝河が構築したような、日米を跨ぐグローバルな知のネットワークの分析が、人文学研究の問題として極めて重要な視点を提供するであろうことが結論として共有された。